

那智沿岸の赤と白の浜

他の熊野古道の地域と同様、那智勝浦町の海岸線には伝説や民話にまつわる場所がたくさんあります。そのうちの二ヶ所は、町の北部に位置する「赤色の浜」と「白菊の浜」です。

赤色の浜

那智湾の狗子ノ川河口付近の海岸は、赤色の浜と呼ばれています。地元の伝承によると、この浜の砂が赤いのは、日本の初代天皇と伝えられる神武天皇が熊野に到着して間もない頃、彼を追い出そうとしたこの地の酋長、丹敷戸畔（ニシキトベ）の軍勢と戦ったためです。非常に激しい戦いで流された血によって、丹敷浦は永久に赤く染まりました。この勇敢な抵抗に敬意を表し、丹敷戸畔は今でも熊野三所大神社で祀られています。狗子ノ川からほど近いところにある「腰掛石」という玉座の形の岩は、神武天皇が戦いの後に休息をとった場所と言われています。

白菊の浜

白菊の浜は、狗子の浦湾にあります。この浜には菊が生えていますが、白菊の浜という名は白菊姫の伝説にちなんだものでもあります。白菊姫は、1180年から1185年まで続いた源平の戦いで敗れた平家の武将、平維盛の侍女だったと伝えられています。平家の苦難を描いた『平家物語』という軍記物語には、維盛が出家するきっかけとなる高野山付近での出会いの場面があります。その後、彼は熊野を参詣し、浜の宮から舟で沖に出て入水しました。

地元の伝承にはこの話の続きがあります。その後まもなく熊野に到着した白菊姫は、熊野古道を歩き回ってかつての主人を探しました。やがて宇久井村にたどり着くと、村人が彼女に起こったことを聞かせました。失意の白菊姫は、浜辺に小屋を建て、そこで維盛のために祈りながら余生を送りました。この浜は彼女にちなんで名づけられました。